

母親の情動表現スタイルが女子大学生の情動表現スタイルと 自尊感情や自立心に与える影響

—母子の信頼関係を媒介として—

森 下 正 康

(本学発達教育学研究科教授)

福 井 え が お

(発達教育学部09期生)

本研究は、女子大学生の母親の情動表現スタイルが、娘の情動表現スタイルと自尊感情や自立心にどのような影響を与えるかを明らかにすることを目的とした。次のような仮説を設定した。母親の親和的な情動表現スタイルは、娘と母との信頼関係を高め、その信頼関係が娘の親和的な情動表現を高め、さらに娘の自尊感情および自立心を高めるだろう。その反対に、母親の否定的な情動表現スタイルは、娘の否定的な情動表現を直接高めるとともに、娘と母の信頼関係を低下させ、それが娘の自尊感情や自立心を低下させるだろう。女子大学生215名を対象に質問紙調査を行い、自分と母親の情動表現スタイルの特徴、母子関係の特徴、性格の特徴の測定を行った。因子分析の結果、情動表現スタイルについては母と娘に共通して「親和的情動表現」「否定的情動表現」「情緒的混乱」の3因子が得られ、母子関係については「信頼愛情」「意思疎通」の2因子が、性格の特徴については「自尊感情」「分離独立心」「自立心」の3因子が得られた。各因子に対応する尺度を構成し信頼性を確認し、共分散構造分析を行った。分析に当たって、「信頼愛情」因子と「意思疎通」因子の背景に『信頼関係』という潜在変数を導入した。さまざまな視点から分析を行った結果、最終的に適合性の高いパスモデルが得られた。①仮説とは反対に、娘の「親和的情動表現」が多いほど母親の「親和的情動表現」を高め、娘の「否定的情動表現」が多いほど母親の「否定的情動表現」を高めていた。②娘の「親和的情動表現」が、娘と母親の『信頼関係』を高め、母親の「否定的情動表現」が『信頼関係』を低下させていた。これは仮説を部分的に支持していた。③娘と母の『信頼関係』が母親の「親和的情動表現」を高めると共に、娘の「自尊感情」を高めていた。前者は仮説とは反対で、後者は仮説に沿った結果であった。④「自立心」が「自尊感情」と「分離独立心」を高めていた。以上、仮説とは異なって、娘から母親への情動的な相互作用の影響が強く、そのようななかで、娘と母親の信頼関係や娘の自立心、自尊感情が形成される可能性が示唆された。

キーワード：情動表現スタイル、母子関係、自尊感情、自立心、女子大学生

問 題

本研究は、女子大学生の母親の情動表現スタイル (emotional expressivity) が、娘の情動表現スタイルと性格特性 (自尊感情や自立心) にどのような影響を与えるかを明らかにすることを目的とした。情動表現スタイルは感情特性または情動特性 (emotional trait) ともよばれ、喜びや悲しみ、怒り、恐れなどのように一時的で急激な感情の動きについて、個人が持つ特定の情動の特徴を指している (奥村, 2005)。情

動表現スタイルは個人の感情の動きとその表現の特徴であり、肯定的で親和的な情動表現 (喜ぶ、感謝する、ほめる、励ます、感激するなど) が多いか、拒否的で否定的な情動表現 (怒る、攻撃する、批判する、軽蔑する、不満を言うなど) が多くかに分類することができる。このような情動表現スタイルは、生得的に決まるものではなく、個人と周囲の環境との相互作用のなかで形成されていくものと考えられる。特に、その形成には、親の養育態度や愛着関係の

要因とともに、親の情動表現の特徴が重要な要因として取り上げられる（奥村，2005）。

本研究ではまず第1に、母親の情動表現スタイルが子どもの情動表現スタイルや母親と子どもの信頼関係にどのような影響を与えるかを探りたい。母親は、子どもにとって身近な存在であり、一般に子どもと過ごす時間が長く、関わりが深いとされるので、母親の情動表現スタイルに焦点を当てる。

3歳～6歳の子どもの母親を対象とした田中（2009）の研究において、自己中心的で不快感を与える情動表現スタイル得点の高い母親の子どもは、自己コントロール得点が低く、否定的情動得点が高かった。それに対して、親和的・共感的な情動表現スタイル得点の高い母親の子どもは、自己コントロール得点が高かった。このように、母親の情動表現スタイルの特徴が、子どもの自己コントロールや否定的情動に影響を与えていた。奥村（2005）は、母親が喜びを経験しやすければ子どもも喜びを経験しやすく、母親が怒りを経験しやすければ子どもも怒りを経験しやすいというように、子どもの特定の情動が、母親の多様な情動経験と密接に関わり合いながら形成されていることを示した。また、小林（2007）の研究でも、母親がよく笑うほど子どもの喜びの表出・自己制御・自己主張が促進され、母親の怒りが多いほど子どもは不快感を表出しやすいという結果であった。このように、母親の情動表出傾向が子どもの情動表出や情動制御に影響を与えていることが示唆された。

山内（2010）は、理論的な視点から、母親の感情特性が青年の感情特性に影響を与えるメカニズムについて検討した。認知的評価の枠組みが母親から子へと言語的やりとりを媒介して伝わり、間接的に青年の感情特性に影響するという“認知レベルの学習”と、母親の感情特性が連合学習によって直接的に青年の感情特性に影響するという“行動レベルの学習”の2つの学習の存在を仮定している。高校生とその母親を対象にした彼の研究結果では、4つの感情（怒り、悲しみ、不安、恥）において認知レベルの学習のみが見出され、行動レベルの学習はいず

れの感情においても見出されなかった。この結果から、青年の感情特性が、連合学習のメカニズムではなく、認知的評価に関する母親との言語的やりとりのような比較的高度な認知処理をとともなう過程によって形成されると示唆している。

本研究においては、単なる感情や情動レベルの特徴ではなく、個人を特徴づける特性レベルとしての情動表現スタイルの形成に焦点を当てたい。子どもは母親との相互作用の中で、母親の情動表現スタイルの影響をどのように受けるのであろうか。母親の情動表現スタイルが女子大学生の情動表現スタイルに直接影響するのか、それとも母親と娘との信頼関係を介して娘の情動表現スタイルに影響するのかに注目した。母親から愛され理解されているという信頼関係は、娘の情緒の安定にとって大切な要因である。母親との間に信頼関係を築くためには、まず母親が暖かくおだやかで親和的な情動特徴を示すことが基盤となるだろう。さらに、母親との間に信頼関係がある娘は、その相互作用を通じて人の気持ちに寄り添ったり、感謝を伝えたり、喜びを表現したり、といった親和的で共感的な情動表出が多くなるのではないかと考える。他方、母親の攻撃的で冷たく否定的な情動表現は、娘の母親に対する愛情や信頼感を低下させだろう。また同時に、母親の否定的な情動表現は、それ自身周りの人の緊張度を高め、ストレスとともに直接に否定的な情動を娘に生起させ高めるのではないかと考える。

モデリングの視点から、母親の情動表現の特徴は、子どもの情動表現のモデルになりやすいだろう。従来の研究では、子どもとモデルとの関係が親和的な場合、向社会的行動のようなポジティブな行動のモデリングが子どもに生じやすく、子どもとモデルの関係が非親和的な場合、攻撃行動のようなネガティブな行動のモデリングが子どもに生じる可能性が高いことが示唆された（森下，1996）。したがって、情動表現に関しては、子どもと母親の信頼関係が高い場合に、親和的な情動表現のモデリングが子どもに生じやすく、信頼関係が低い場合には否定的な

情動表現のモデリングが子どもに生じやすいと予想される。

ところで、母親の情動表現スタイルは、単に娘の情動表現スタイルや親子の信頼関係に影響するだけではなく、子どもの自尊感情や自立心にまで影響を及ぼすと考える。従来、親子関係と子どもの自尊感情や自立心との関連について、いくつかの研究がなされている。小川ほか(2011)は、女子大学生は、同姓である母親の自分への評価を経由して自分の自尊感情を評価するという構造がみられることを明らかにした。また、佐々木・島田(2000)によれば、大学生において、親と友人どちらの関係においても、サポートを受けすぎていると感じているものは、与えすぎていると感じている者よりも負担感が強く、友人との関係において、サポートを受けすぎていると感じている者は、同等と感じている者や与えすぎていると感じる者よりも自尊心(自尊感情)が低い傾向が認められた。

藤松・野島(2002)によると、子どもの自立に対してより受容的な母親ほど、子どもの成長を信頼している傾向が強く、さらに父親は家族との情緒的なかわりが高くと認知しており、受容的でない母親ほど子どもの成長に対して寂しさを感じている傾向が強かった。つまり、子どもの自立に対する親の受容については、子どもの成長を信頼することが重要な要素であることを示唆している。また、長崎(2004)は、大学生の母親を対象にした研究において、子どもから母親へのコミュニケーション行動が多いと認知している母親の方が、そうでない母親に比べて子どもの独立を受容できていた。水本・山根(2010)は、大学生女子とその母親を対象にした研究において、母娘関係には距離の遠近といった量的特性のみでなく、娘が母との関係に自己統制感を持つことができるかどうかという質的特性があり、これらが娘の適応と自立にかかわっていることを明らかにしている。以上のような研究の中で、自立にとって娘と母親との信頼関係が重要な変数だと示唆されている。しかし、母親の情動スタイルが子どもの自尊感情や自立心にどのような影響を与えるかに関する

研究はみられない。

福島(1992)によれば、自立性は、第一に他者への精神的な依存を断ち切り、自分の行動は自分で決定し、その責任を負えるというように、周囲に流されないだけの「自分」を確立し、自分なりの意志・信念を持つこととされている。さらに、それだけではなく、他者のことも考えることのできる脱自己中心性と、他者と適切な距離をとることができる、他者との関係性の確立がなされることでもであると指摘する。自分の決定に責任を持ち、他者のことも考慮できるという点は重要な指摘である。一方、自立は一般に経済的・精神的な援助や支配を受けないで人に従属せず自力でやっていくことと考えられている(吉川, 2007)。本研究では大学生を対象とするので、経済的自立の要因は外して、自らの判断と意思で行動を遂行する精神的自立を扱うことにする。

現在、親子の相互作用の中で生じる愛着関係が自立の基盤になっていると考えられている(高橋, 2010; 吉川, 2007)。母親と愛着関係を築いている場合は、子どもは安心して外の世界に目を向け自立した行動がとれる(岡本, 2005)。また、青年期の自立心(心理的離乳)の発達について、西平(1990)が三段階説を導き、落合(2009)は五段階説を提唱している。西平の説は子どもが親からどのように自立していくかを示したものであるのに対し、落合の説は親がどのように子どもを自立させていくかを示している(大野木, 2009)。このような研究において、子どもが親を必要とし、親がその要求にこたえ、双方が深く関わり合うことが子どもの自立の基礎になっていることが示唆されている。青年期においても、依存と自立が対立するものというよりは、乳幼児が母親との愛着関係に支えられて探索行動ができるのと同じように、青年も自分をよく理解して信頼してくれる人に支えられて自立すると考える。時には親を自分の人生のモデルとして認識するような関係が重要である。

また、このような愛着関係や信頼関係に支えられて自尊感情が形成されるのではないかと考

える。自尊感情は、ある程度ありのままの自己を受容したうえで、自分を価値ある存在だという意識や感情をともなった状態である。また、すでに述べたように、自立心は周囲に流されないだけの「自分」を確立し、自分なりの意志・信念を持つことととらえられている(福島, 1992)。そのような自立心を確立するためには基本的に自己受容や自尊感情を必要とするだろう。さらに、自尊感情や自立心は、人間関係、特に良好な母子関係が支えられられる。また、自立心は、本人自身の親和的な情動表現や否定的な情動表現のある程度のバランスの上に乗っているだろう。

以上をまとめると次のような仮説が考えられる。母親の親和的な情動表現スタイルは、娘と母との信頼関係を高め、その信頼関係が娘の親和的な情動表現を高め、さらに娘の自尊感情および自立心を高めるだろう。その反対に、母親の否定的な情動表現スタイルは、娘の否定的な情動表現を直接高め、また娘と母の信頼関係を低下させ、それが娘の自尊感情や自立心を低下させるだろう。

ここまで、母親の情動表現の特徴が、娘の情動表現の特徴や母と娘の信頼関係に影響を与えるという視点から考えてきた。しかし、娘の情動表現の特徴や母と娘の信頼関係が、母親の情動表現の特徴に影響しているという可能性がある。つまり、母と娘の信頼関係は、母と娘の情動の親和的表現を高め、否定的情動表現を低下させる可能性がある。また、自尊感情も同じように娘の情動の親和的表現を高め、否定的情動表現を低下させることも予想される。さらに、娘の否定的な情動表現は、母親の否定的な情動表現を高めるだろう。そのように、母と娘の特徴の間には相互規定的な関連が予想される。以上の点を考慮しながら分析を進め、仮説を慎重に吟味する。

方法

1. 調査対象

事前に発達心理学専攻の4年生12名に協力してもらい、質問紙の内容に不備がないか確認

した。そして、女子大学の学生223人(児童学科の学生111名と教育学科の学生112名)を対象に、質問紙調査を実施した。そのうち、有効回答が得られた215人のデータについて分析を行った。年齢は18歳から21歳で平均19.0歳であった。学年は1回生211人、2回生2人、3回生2人であった。この内、現在、母親との同居者は106人、別居者は95人、不明は14人であった。母親(または母親に代わる養育者)の年齢は38歳から71歳で平均47.61歳であった。

2. 手続き

授業の始めの20分程度で調査を実施し、その場で回収した。

3. 調査期間

2012年6月下旬～7月中旬。

4. 調査の内容

質問紙の内容はおおよそ以下の通りであった。

(1) フェイスシート：項目

「学科名」、「回生」、「年齢」「母親の年齢」「母親との同居・非同居」であった。

(2) 情動表現スタイル

家族の中での母と娘の情動表現の特徴(以後は情動表現スタイルと記す)を測定するために、田中(2009)の「情動表現スタイル尺度」の一部を利用した。40項目の中から、娘からみた母親像と自分自身について代表的で比較的評定しやすいと考えられる20項目を選択した(表1参照)。母親と自分について各20項目に関して4段階評定(1 まったくない、2 ほとんどない、3 ときどきある、4 よくある)を求めた。

(3) 母子関係の測定

母と子どもの心理的距離とともに信頼や愛情関係を測定するために、母子の密着尺度(藤田, 2003)を使用した。ここでは、母娘の日常生活におけるやり取りの様相から、母娘における行動的・精神的距離を測定している。本研究では、32項目中、30項目を使用した(表3参照)。各項目への5段階評定(1 ちがう、2 ややちがう、3 どちらともいえない、4 ややそうだ、5 そうだ)を求めた。

(4) 娘の自尊感情と自立心の測定

自尊感情や自立心を測定するために「精神的自立尺度」(福島, 1992) 22項目を使用した(表4参照)。上記と同じように5段階評定(1 ちがう, 2 ややちがう, 3 どちらともいえない, 4 ややそうだ, 5 そうだ)を求めた。

結果

1. 尺度の因子分析

仮説を検証するにあたって、信頼性のある尺度を作成するために、それぞれの尺度項目について因子分析を行った。まず主成分分析を行い、固有値の変動(スクリープロット)とその分散を参考に因子数を決定し、次に最尤法による因子分析を行い、最終的にプロマックス回転を行った。因子パターンから各因子に負荷の高い項目(原則として0.30以上の項目)をもって尺度を構成する項目として選出した。続いて、尺度の信頼性を確認するために、 α 係数を求め、項目の粗点の和を尺度得点とした。

(1) 情動表現スタイル

上記の手順にしたがって、娘の情動表現スタイル20項目について因子分析を行い、次に母の情動表現スタイル20項目について因子分析を行った。その結果、娘と母では因子の内容がほとんど一致していたので、母娘に共通の因子を取り出すために、母娘に関するデータをこみにして改めて因子分析を行った。その結果、4因子が得られた。全体に因子負荷量が低い2項目は削除した。第1因子は、感謝の気持ちを表したり、人を励ましたり、人を尊敬したりほめたりする、共感的でポジティブな情動を示す情動表現スタイルで「親和的情動表現」因子と命名した。第2因子は、相手を責めたり、不満を示したり、家族と口論したり、不機嫌になったりというような、攻撃的で不快感を与えるネガティブな情動を示す情動表現スタイルで「否定的情動表現」因子と命名した。第3因子は、うろたえたり、パニックになったり、ヒステリックで情緒的な混乱を示す情動表現スタイルで「情緒的混乱」因子と命名した。第4因子は、項目数が2項目であったので因子の命名は省略

した。各因子に高く負荷する項目の粗点の和を尺度得点とした。第1, 第2, 第3因子に対応する尺度の α 係数は表1に示すように高かったが、第4因子については.557と低い値であったので、以後の分析では使用しなかった。因子間の相関を調べた結果、第1因子の「親和的情動表現」は他の因子と相関はなかったが、第2因子の「否定的情動表現」は第3因子の「情緒的混乱」と正の相関があった(表2)。

表1 情動表現スタイルの因子と項目 (α 係数)

第1因子【親和的情動表現】 (.844)	
1. 他者が親切なことをしてくれたときに感謝の気持ちを表す。	
2. 悲しんでいる他者を励まそうとする。	
3. 他者に対して心から敬意を示す。	
4. よい行いをした他者を褒める。	
5. 誰かの将来の夢や計画に感激したとき、それを表す。	
6. 素敵の人に対して素敵だね、と伝える。	
第2因子【否定的情動表現】 (.800) 情動制御弱い	
1. 家族内でトラブルが起きた時に相手をせめる。	
2. 他者のふるまいに対して不満を表現する。	
3. 家族と口論する。	
4. 家族からの不当な扱いに不機嫌になる。	
5. ささいなことでかっとする。	
6. 他者の行動に対して軽蔑を示す。	
第3因子【情緒的混乱】 (.791)	
1. 失敗などをしたときにひどくうろたえる。	
2. ひどく緊張するとパニックになる。	
3. 何かがうまくいかなかったときに失望を表す。	
4. 納得出来ない言い争いの後で思わず泣いてしまう。	

表2 情動表現スタイルの因子間相関

因子	1	2	3
1 親和的情動表現	1.000	-.069	.105
2 否定的情動表現	-.069	1.000	.317
3 情緒的混乱	.105	.317	1.000
α 係数	.844	.800	.791

表3 母子関係の因子と項目 (α 係数)

第1因子 信頼愛情 (.846)

1. 母が何かを探していたら私も一緒に探してあげる。
2. 私は母の考えは、何となく分かっているように思う。
3. 母は、私のことを常に思ってくれている。
4. 私は母にしかられると悪いなと思う。
5. 母はその日の私が食べたいものを良く心得てくれている。
6. 私は母の顔をみると何となく安心できる。
7. 私が元気でなさそうであったら、私の母は私を励ましてくれる。
8. 私が考えていることを母はよく知っている。
9. 私は母を失ったら生きる力をなくしてしまうと思う。
10. 私は、母の日や母の誕生日には、お祝いの挨拶をしたり何かをプレゼントすることがある。
11. 私は母を一人占めしたいと思うことがある。
12. 学校から帰ったら母がおやつを用意してくれていることがよくある。
13. 私は母に何かを頼まれたら断りづらい。

第2因子 意思疎通 (.783)

1. 私は母に学校であったことや、友達のことをよく話す。
2. 学校であった出来事や友達と話したことなどを母は毎日聞いてくれる。
3. 私は母と毎日何らかのコミュニケーションをとっている。
4. 母は私の友達のことを良く知っている。
5. 私の部屋へ母が入ってきてても別に気にならない。
6. 私は小学校時代に母と一緒に風呂にはいることがよくあった。
7. 外に出ているとき母と電話で連絡を取ることが良くある。

(2) 母子関係

母娘関係を示す30項目について因子分析を行った結果、4因子が得られた(表3)。全体に因子負荷量が低い3項目は削除した。第1因子表は、母と娘はお互いのことを理解しあい、大切に思いあい、母親への愛情を示す因子で、「信頼愛情」因子と命名した。第2因子は、母親との間に豊かなコミュニケーションがあることを示す「意思疎通」因子と命名した。第1因子と第2因子に対応する尺度の α 係数は、それぞれ0.846、0.783で、両因子の間には、0.668という高い相関があった。第3因子は α 係数は0.630と低く、第4因子は項目数が2個と少なかったため、以後の分析では使用しなかった。

(3) 自尊感情と自立心

娘の自尊感情や自立心に関する22項目について因子分析を行った結果、3因子が得られた(表4)。第1因子は、母親から自分が信頼され理解されているという感覚と、自己を受容するとともに自己への信頼を示す因子で、母親の信頼や理解に支えられた「自尊感情」の因子と命名した。第2因子は母親と自分は異なる存在だという自覚と客観的な視点を持ち、母親から独立したいという気持ち持つ因子で、「分離独立心」の因子と命名した。第3因子は、自分で判断し自分の言ったことに責任を持ち、自分の人生を自分で切り開いていくという因子で、「自立心」の因子と命名した。「自尊感情」と「分離独立心」および「自立心」の間には低い正の相関がみられ、「分離独立心」および「自立心」の間にはやや高い正の相関がみられた。因子に対応する尺度の α 係数はいずれも比較的高い値であった(表5)。

表4 自尊感情と自立心の因子と項目 (α 係)

第1因子【自尊感情】 (.792)

1. 母親は私の事を信頼してくれていると思う。
2. 母親は私の事をよく知っているし、理解してくれている。
3. 自分の良いところも悪いところありのまま認めている。
4. 自分の個性や能力を生かそうとする。
5. 精神的に安定しており、一人の人間としてしっかりしている。
6. 自分の意志を母親にはっきりという。

第2因子【分離独立心】 (.792)

1. 母親には母親の、自分には自分の考えがあると思う。
2. 私なりの個性を尊重したい。
3. 母親の言うことが絶対に正しいとは限らないと思う。
4. 母親と自分とは異なる存在であると思う。
5. 自分の中に色々な否定的感情があることを認めている。
6. 生きることの意味・価値を自分で見いだす。
7. いつまでも母親を頼ってはいられないと思う。

第3因子【自立心】 (.785)

1. 自分の事は自分で判断する。
2. 自分の言ったことに責任を負える。
3. 困ったときなるべく人の助けを借りずに自分で判断する。
4. 自分の人生は自分で切り開いていく。
5. 何でも母親に相談するのではなく、自分で考えて行動する。
6. 悲しみ・怒りなど自分の感情を自分の中で処理している。

表5 自尊感情等の因子間相関

	1	2	3
1 自尊感情	1.000	.110	.264
2 分離独立心	.110	1.000	.440
3 自立心	.264	.440	1.000
α 係数	.792	.792	.785

各尺度の度数分布について、「否定的情動表現」「信頼愛情」「意思疎通」「自尊感情」「自立心」「情緒的混乱」尺度得点は、それぞれ比較的正規分布に近い姿を示していた。他方、「親和的情動表現」「自尊感情」「分離独立心」は得点分布がいくぶん右寄り（高得点）に偏っていた。

2. 共分散構造分析

仮説に関して、母の情動表現スタイルと娘の情動表現スタイル、母と娘の関係、娘の自尊心や自立心が相互にどのような影響を与えているかについて総合的に明らかにするために、共分散構造分析を行った。そして、最終的に図1のようなパスモデルを得た。パス係数はすべて1%水準で有意で、かつ適合性の高いパスモデルであった。

分析の手順として、まず、仮説に沿っているようなパスモデルを作成した。「信頼愛情」因子と「意思疎通」因子は高い相関があったので、

『信頼関係』という潜在変数を導入した。また母と娘の「情緒的混乱」という変数は、「否定的情動表現」変数と正の相関があり、かつ、全体としてパスモデルの適合性を低下させたので外すことにした。また、仮説に沿ったパスのほかに、仮説とは対照的に、母と娘の『信頼関係』が母親や娘の情動表現スタイルに影響し、また、娘の「自尊感情」が母と娘の『信頼関係』を高める可能性を考えた。さらに、情動の親和的表現や否定的情動表現について、母親と娘の間には相互の影響が考えられるので、双方向にパスを引いた。しかし、いずれの情動表現についても母親から娘への影響は有意でなく、娘から母親へのパスのみが有意であった。また娘と母親の間の信頼関係についても、母親の親和的情動表現は『信頼関係』に影響するのではなく、逆に『信頼関係』が母親の「親和的情動表現」に影響していた。さらに娘の「自尊感情」も母と娘の『信頼関係』に影響すると考えたがそのようなパスは有意でなかった。「自尊感情」「分離独立心」「自立心」の3特性の誤差に対して互いに双方向からのパス引いたが、図のようなパスの方が適合性を高めるということが分かった。

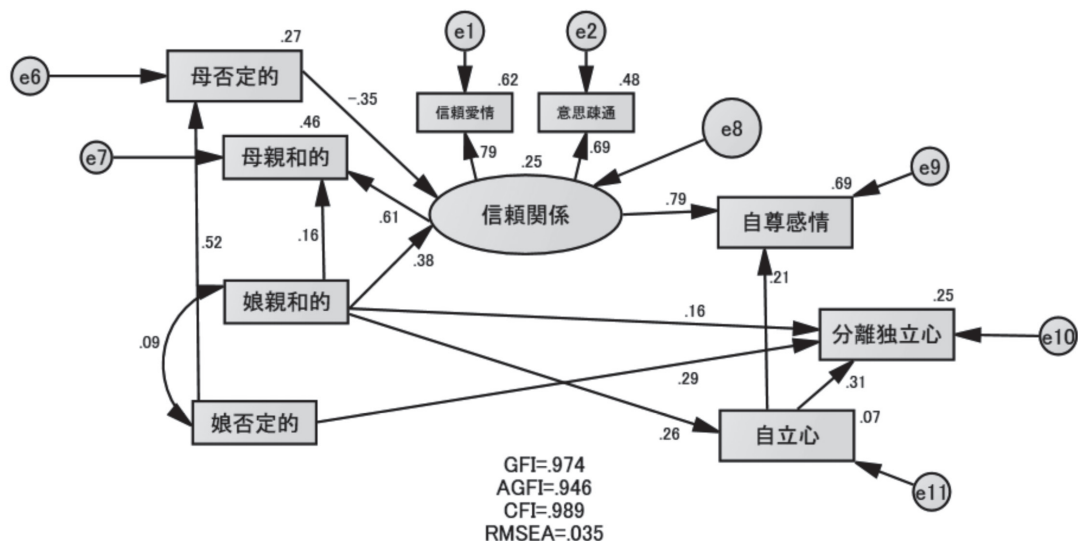


図1 母と娘の情動表現スタイルと信頼関係、自尊感情

最終的なパスモデル(図1)の結果は次のようなことを示していた。①娘の「親和的情動表現」が多いほど母親の「親和的情動表現」が多く、娘の「否定的情動表現」が多いほど母親の「否定的情動表現」が多かった。特に後者のパス計数は高かった。②娘の「親和的情動表現」が多く母親の「否定的情動表現」が少ないほど、娘と母親の『信頼関係』が高くなり、その『信頼関係』が母親の「親和的情動表現」を強く高めていた。③『信頼関係』は娘の「自尊感情」を高めていた。また、娘の「親和的情動表現」が多いほど「自立心」が高く、娘の「否定的情動表現」と「親和的情動表現」が多いほど娘の「分離独立心」が高かった。④「自立心」が「自尊感情」と「分離独立心」を高めていた。特に母親の「親和的情動表現」と「自尊感情」の説明率が高く、いずれも娘と母の間の信頼関係が強く影響していた。

母親の変数と娘の変数との間には、当初次のような関連が予想された。つまり、母親と娘の「親和的情動表現」の間、母親と娘の「否定的情動表現」の間、母親の「親和的情動表現」・娘の「親和的情動表現」・娘と母の「信頼関係」の3者相互の間、『信頼関係』と娘の「親和的情動表現」の間、さらに『信頼関係』と「自尊感情」の間、これらの間には相互規定的な関連が予想された。しかし、分析の結果はそのような相互関連はみられなかった。

考察

本研究は、女子大学生の母親の情動表現スタイルが、娘の情動表現スタイルや娘と母の信頼関係、および娘の自尊感情や自立心の形成にどのような影響を与えるかを明らかにすることを目的とした。まず仮説に沿いながら、そして多様な視点から共分散構造分析を行った。その結果、高い適合性を持ったパスモデルが得られた。主要な結果は次の通りであった。①娘の「親和的情動表現」が母親の「親和的情動表現」を高め、娘の「否定的情動表現」が母親の「否定的情動表現」を高めていた。②娘の「親和的情動表現」が、娘と母の『信頼関係』を高め、母親の「否定的情動表現」が『信頼関係』を低下さ

せていた。③娘と母親の『信頼関係』が母親の「親和的情動表現」を高め、さらに娘の「自尊感情」を高めていた。④「自立心」が「自尊感情」と「分離独立心」を高めていた。

以上のように、まず、①娘の「親和的情動表現」が母親の「親和的情動表現」を高め、娘の「否定的情動表現」が母親の「否定的情動表現」を高めていた。したがって、母親の情動表現が娘の情動表現を高めるという、母親から娘への影響という仮説は支持されず、正反対の結果であった。つまり、娘が母親の情動表出の特徴に影響を与えていたのである。その際、特に娘の否定的な情動が母親の否定的な情動に強い影響を与えていた。一般に、激しい否定的な情動が相手の激しい否定的な情動を引き起こすと考えられるが、その方向が娘から母親へとということであった。調査対象が、女子大学生であることから、娘から母親への影響も予想されることではあった。

次に、②娘の「親和的情動表現」が、娘と母親の『信頼関係』を高め、母親の「否定的情動表現」が娘と母親の『信頼関係』を低下させていた、という点は仮説通りであった。③しかし、母親の「親和的情動表現」が『信頼関係』に影響するのではなくて、むしろ『信頼関係』が母親の「親和的情動表現」を高めていた、という点は予想とは正反対であった。母親の否定的情動表現の特徴が信頼関係に影響するのに対して、親和的情動表現の特徴には信頼関係の方が影響するという点は注目される。このことは、娘との信頼関係のなかで、母親は娘との豊かなコミュニケーションや愛情を育み、情緒の安定や他の人に対する信頼を形成し、人の気持ちに寄り添ったり、感謝を伝えたり、喜びを表現したりといった親和的で共感的な情動表出を高めると考えられる。ただし、このパス図では信頼関係の説明率はあまり高い値ではないので、信頼関係に影響する重要な要因は、娘の親和的情動や母親の否定的情動以外にもあると考えられる。同じようなメカニズムが娘にも生じると予想されるが、『信頼関係』から娘の「親和的情動表現」へのパスは有意ではなかった。

③娘と母親の『信頼関係』は娘の「自尊感情」を高めていた。また、娘の「親和的情動表現」が「自立心」を高め、娘の「否定的情動表現」と「親和的情動表現」が「分離独立心」を高めていた。「自尊感情」には娘の「親和的情動表現」は直接効果を持たないが、『信頼関係』を介しての間接効果をもち、間接的に自尊感情を高めていることが示唆された。

特に、母親の「親和的情動表現」と娘の「自尊感情」の説明率が高く、いずれも娘と母の間の信頼関係の影響が説明率を高めていた。つまり、娘の親和的情動表現からプラスの影響を、母親の否定的情動表現からマイナスの影響を受けた、娘と母親の間の『信頼関係』が主役を演じている。『信頼関係』を高める母親の否定的情動表現の少なさは、娘の否定的情動表現の少なさの影響を強く受けており、詰まるところは娘の情動表現が信頼関係の源となっていることが示唆され、仮説とは異なった結果であった。また、「自尊感情」の内容は、母親の理解や信頼に支えられての自己への信頼であったことも、「自尊感情」の説明率の高さに関連しているだろう。

④自尊感情・分離独立心・自立心の3特性の関連について、「自立心」が「自尊感情」と「分離独立心」を高めていた。これらの3特性の間には相関関係が予想されるが、どちらからどちらにより強く影響するかという視点から分析したところ、上記以外のパス係数は有意でなかった。つまり、「自立心」が、「自尊感情」や「分離独立心」を支えていると解釈される結果であった。自分で判断し自分で責任を持ち、自分の人生を自分で切り開いていくという自立心が、自尊感情や分離独立心の根底にあると考えられるが、この点については今後の吟味が必要だろう。ただ、このパス図においては「自立心」そのものの説明率は高いものではなかったため、自立心を高める要因は何かを探る課題が残されている。

相互作用という視点から、娘と母の『信頼関係』と娘や母親の「親和的情動表現」、娘の「否定的情動表現」と母親の「否定的情動表現」、

娘の「自尊感情」と『信頼関係』の間には相互作用があり、相互調整的なプロセスが働いていると推定される。そのような母親と娘との相互作用の中で、両者の信頼関係、娘と母親の情動表現スタイル、娘の自尊感情が形成されると考えられる。しかし、この分析を通じて、双方向からのパスは有意でなく、一方からのパスが有意であることが分かった。それも仮説とは反対に、娘から母親への影響の方が強かった。したがって、母親の情動表現スタイルはモデリングの作用を通じて娘に影響するという基本的な仮説は支持されなかったといえる。また、母親と娘の親和的な情動が、互いの信頼関係を形成するだろうという基本的な仮説も支持されなかった。

以上、娘からの母親への情動表現スタイルの影響の方が強く、母親から娘への影響の方が弱いと解釈してきた。他方、次のような別の視点からの解釈も成立するだろう。このような結果には、母親の情動の特徴や母親との信頼関係について娘が評定を行ったということが反映されている可能性がある。つまり、そこに評定者の認知的枠組みが影響しているかもしれない。娘自身の情動表現スタイルの認知が、母親の情動表現スタイルの認知に影響を与え、母親の情動表現スタイルの特徴を自分の特徴に類似したものとして認知している、ということも反映している可能性がある。したがって、この分析におけるパスは因果関係を示す指標というよりは、そのような認知のプロセスの特徴が作用していたと解釈することもできる。この点を明確にするためには、実際に母親本人に自分の情動表現の特徴や娘との信頼関係について評定してもらい、その結果を比較検討する必要があるだろう。

今後の課題として、まず情動表現スタイルについて。「否定的情動表現」スタイルの内容は、相手を責めたり、不満を示したり、家族と口論したり、不機嫌になったりというような、攻撃的で不快感を与えるネガティブな情動スタイルでイメージしやすいものとなっている。それに対して、「親和的情動表現」スタイルは、感謝の気持ちを表したり、人を励ましたり、人をほ

めたりする、共感的で向社会的な情動を示すスタイルでイメージしにくいものとなっている。ここで測定された親和的情動表現スタイルは、否定的情動表現スタイルとはほとんど相関がなかった。情動表現スタイルについては、否定的(ネガティブ)な情動とは対照的に喜んだり笑ったりというようなもう少し肯定的(ポジティブ)でイメージが明確な情動特徴を測定すべきであったと反省している。

本研究においては、研究対象は女子大学生であった。したがって、すでに述べたように、母娘関係や母の情動表現スタイルは、娘からの視点に限られていた。そこで新たに母親自身のデータも加えたら、貴重な関連がみられるだろう。また、下宿等をしていて母親と一緒に生活していない学生が約半数いたので、そのことが結果に影響を及ぼしている可能性がある。したがって、一緒に生活している者とそうでない者に分けて分析する必要があるかもしれない。情動表現スタイルは早い段階でおおむね形成されるといわれているので、幼児期や児童期から現在に至るまでの母娘関係や情動表現スタイルについて、縦断的な研究ができればより重要な知見が得られるだろう。さらに母と娘の関係だけにとどまらず、父親や母親と息子や娘との情動表現スタイルの研究が、今後の課題として残されている。

引用文献

藤田達雄 2003 思秋期前の妻の孤独感と母子密着に関する研究—夫婦仲の良さと夫の仕事中心主義との関係に着目して— 名古屋短期大学研究紀要, 41, 75-87.

藤松裕子・野島一彦 2002 母親による子どもの自立の受容に関する研究:父親の家族との関わり方をめぐって 九州大学心理学研究, 3, 59-68.

福島朋子 1992 思春期から成人にわたる心理的自立—自立尺度の作成及び発達の検討— 発達研究, 8, 67-87.

小林 真 2007 子どもの情動表出傾向の予測因子の検討—母親の情動表出傾向と養育態度の影響について— 富山大学人間発達科学部紀要, 1 (2), 13-18.

水本深喜・山根律子 2010 青年期から成人期への移行期の女性における母親との距離の意味:精神的自立・精神的適応との関連性から 発達心

理学研究, 21, 254-265.

森下正康 1996 子どもの社会的行動の形成に関する研究 風間書房

長崎千夏 2004 子どもの自立に対する母親の意識と自尊感情との関連:大学生の子どもを持つ母親を対象に 九州大学心理学研究, 5, 163-170.

西平直喜 1990 成人になること—生育史心理学から— 東京大学出版会

岡本夏木 2005 幼児期—子どもは世界をどうつかむか— 岩波新書

奥村弥生 2005 母親と子どもの情動特性の関連性 九州大学心理学研究, 6, 159-166.

大野木裕明 2009 女子青年からみた親子間の呼称と心理的離乳 仁愛大学紀要, 1, 53-61.

落合義之 1995 心理的離乳への5段階過程仮説 筑波大学心理学研究, 17, 51-59.

小川由希子・山田智世・杉山里美・上岡美紀・平田裕美 2011 父親・母親の言葉かけと青年期女子の自尊感情との関連:影響を及ぼしているのは父親、それとも母親? 女子栄養大学紀要, 42, 35-41.

佐々木 新・島田 修 2000 大学生におけるソーシャルサポートの互惠性と自尊心との関係 川崎医療福祉学会誌, 10, 249-254.

高橋恵子 2010 人間関係の心理学—愛情のネットワークの生涯発達— 東京大学出版会

田中あかり 2009 母親の情動表現スタイルが幼児の気質に及ぼす影響 発達心理学研究, 20, 362-372.

山内星子 2010 母親の感情特性が青年の感情特性に与える影響:感情のデュアルプロセスモデルの枠組みから 発達心理学研究, 21, 287-295.

吉川成司 2007 生涯発達における自立と孤立:愛着理論の視点から 創価大学教育学部論集, 58, 27-44.